

子どもの個を理解する教師力

—学び合う食育の授業—

所属校：練馬区立田柄第二小学校

氏名：大矢真由美

派遣先：創価大学教職大学院

キーワード：個・教師力・食育・聞き合い

I 研究の目的

1 「個」の捉え

子どもの「個」とは何か。重松鷹泰は、「個」について四つの視点を提起している。それらは第1に一人一人のことで、かけがえのないユニークな存在である。第2に、個といいながらも周りのものとつながっており、しかも、周りのものをもって代えることができないものである。第3に、そのつながっている全体に対して責任を感じ、責任をとろうとするものである。第4に、自分はこれでいいのか、というふうに謙虚なものである。¹

「個」とは、子ども一人一人のことであり、誰一人として同じ存在のものはないのであり、また、「個」は、自分はこれでいいのかと自分の生き方を自分自身で追究し、集団のなかでそれを確かめ成長させしていくものなのである。

2 課題意識

(1) 教師力

学習のできる子、運動のできる子、楽器の得意な子、絵を描くことが得意な子、友だちを笑わすことが得意な子、掃除が上手な子、小さい子の世話が好きな子…学校には様々な子どもがいる。子どもの数だけその「個」は存在する。教師も、その「個」を大切にしながら教育活動を行ってきているだろうか。

教師は、授業以外での子どもを、その「個」と認識しているところがないだろうか。教師が本当に子どもの個を認識する場合は、授業でありたい。授業にこそ、子どもが互いにそれぞれの「個」を成長させていける要因がたくさん含まれているはずである。子どもの「個」を理解し、さらに更新させていけることが教師に必要な力であると考えられる。

(2) 食育

個食、孤食、粉食、変食、偏食、飽食、放食、肉食、中食、外食…「食」に関する造語、摂食障害や肥満、食物アレルギーなど、今の社会を映し出すように増え続けている問題である。また昨今の学校には、「キレやすい子ども」「集中力のない子ども」「耐性のない子ども」なども多く見られる。

平成17年度から学校に、食に関する専門家として子どもの栄養の指導及び管理をつかさどる職務として栄養教諭が制度化された。また、学習指導要領の改訂、学校給食法の改正を踏まえて、学校における食に関する指導の基本的な考え方や指導方法を示した「食に関する指導の手引」を平成22年3月に改訂した。²

子ども自らが、自分の身（口）に入る食べ物に関心をもち、栄養についての理解を深め、生命あるそのものに感謝し、自分以外の誰かとともに楽しく食事ができる喜びを味わうところに、人間として必要なものすべてが備わっていると考えられる。だからこそ、学校の授業で食育に取り組む価値があると考えられる。

子どもが誰一人として同じ存在がないように、その子どもの家庭における食生活もまた異なる。その現実を教師は子どもの「個」として理解し、授業に結び付けていけることが教師力であると考えられる。

II 研究の方法

1 研究の手順

- (1) 食育に関する文献を研究する。
- (2) 所属校において食育の授業（第3学年 保健体育「毎日の生活と健康」）を実践する。
- (3) 授業後、子どもの「個」の理解を目的とする子どもの食への思考についての分析をする。
- (4) 授業の逐語記録から授業を省察し、成果と課題をまとめる。（教師力）

III 研究の結果

1 食育の現状

食に関する指導の目標は次の6つの点である。

- 食事の重要性（食事の重要性、食事の喜び、楽しさを理解する。）
- 心身の健康（心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい栄養や食事のとり方を理解し、自ら管理していく能力を身に付ける。）
- 食品を選択する能力（正しい知識・情報に基づい

て、食物の品質及び安全性等について自ら判断できる能力を身に付ける。)

- 感謝の心（食事を大事にし、食物の生産等にかかわる人々へ感謝する心をもつ。）
- 社会性（食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身に付ける。）
- 食文化（各地域の産物、食文化や食にかかわる歴史等を理解し、尊重する心をもつ。）²

以上の目標を達成するために、各教科や道徳、特別活動、総合的な学習の時間等といった教育活動のなかで、地産地消、郷土食、農業体験等の地域の特色を生かした食育が展開されている。

2 授業実践から（第3学年 保健体育「毎日の生活と健康」）

3年生の子どもの多くは、起きたり寝たりする時刻や食事の内容についてなどまだ無意識であり、漠然と1日を過ごしていることが授業後明らかになった。一方で、2年生の時に学習した「バランスよく食べる」「赤・黄・緑を食べる」「三角食べ」「早寝早起き朝ごはん」という食事に関する大切な知識を誰もが発言していた。けれどその知識とは異なり、給食での様子や食事に対する意識は、「野菜は嫌い」「苦いから食べない」「肉が大好き」等であり、行動が伴わないのが現実である。

この結果から、理想とされる食生活は、子どもの食べることへの関心や意識と比べ、少々差があるといえる。元来こうした知識は、親が意識して子どもに伝えることであって、この伝達も各家庭で異なっていることがいえる。

だから、子どもがせっかく手に入れた食に関する知識、能力を意識化し、自分のくらしへと活用していくことはできないかと教師は願うのである。しかも、その願いは、教師からの押し付けではなく、子どもが自身の本当の喜びとなる願いに変えていかなければ本当の意味での成果はあり得ないと考えられる。

IV 考察

1 自己内対話からの更新

子どもの思考は、これまでの経験や各家庭環境等で創られてきている。そしてその思考は、自分の外に在る人、もの、環境によって刺激され広がりもするし深まりもするし、伸びていくものである。

つまり、自分の思考は、授業における他の発言を能動的に聞くことによって、それを自分に反映させ、自分と対話することで更新されていくのである。

2 学び合う食育の授業モデル（第3学年 保健体育「毎日の生活と健康」食事プロジェクト）

(1) 子どもの実態

Ⅲ-2の内容

(2) 授業内容

- ・「ぼく・わたしの食べる」について、「今のいいところ」と「問題点」を出し合う。
- ・『楽しく食べるために、必要なこと』について自分の考えを明らかにする。
- ・聞き合いの授業から、自分の考える『楽しく食べるために必要なこと』をまとめ実際に試してみる。

(3) 教師の支援（教師力）

子どもの食に対する意識化を図るためにも、子ども同士の聞き合いの場で教師は、極力出しゃばってはならない。子どもの思考と教師の思考は必ずしも同じではないからである。また、子どもの理解しにくい言葉であっても、教師が訳すのではなく子ども同士で理解し合えるように図る。教師に最も必要なことは、子どもを教師の視点で決めつけてしまうことなく、その子どもそのままを受容しどこまでも傾聴するという謙虚さである。

3 これからの課題

これまでの自身の授業を振り返ると、子どもを尊重するつもりでいながら、教師の価値観の押し付けや指導案の枠にはめた発言を取り上げてきたように思う。そんな授業に子どもはいつしか、「先生の望む答え」「正しい答え」を発言することが当たり前のようにできてしまったように思われる。こうして教職大学院での学びの機会を得て、社会のなかで学校は何をするべきなのだろうか。教師の役割は一体何ののだろうかと思は思う。

昨今の教育現場は多忙に見舞われている。中にはその多忙に不満や愚痴だけが山積されてしまう教師もいる。けれど、子どもを中心にして教育活動を考え行なったとき、我々の使命がどれだけ崇高なものかを改めて思い知らされる。学校は、教師は、子どもが人間へと成長していくために力を貸す存在である。子ども一人一人が幸せに社会生活を送れる力を育てていくのである。だから教師こそ、謙虚な姿勢で子どもから学んでいかなければならない。また、そのためにもお互いに学び合う教師集団を築いていかなければならない。

【引用文献】

- 1 重松鷹泰講演集「歩み続けむ」上水内教育会刊
- 2 食に関する指導の手引（平成22年3月）文部科学省

【参考文献】食農教育 社団法人 農山漁村文化協会